

# 日本語会話における「いや」についての一考察 — 認識的優位性の主張との関連 —

名塩征史

## Uses of *iya* to Assert Epistemic Primacy in Japanese Conversation

Seiji Nashio

The purpose of this paper is to determine how the Japanese interjection *iya* is used and the function it serves in Japanese conversation. This interjection, commonly used in Japanese daily conversation, has usually been explained as expressing a negative response to a previous utterance. However, in a conversation where participants assess something, *iya* seems rather to fulfill an epistemic function—conveying knowledge claims in and through turn-at-talk and sequences of interaction. This paper demonstrates how each participant asserts his epistemic primacy by uttering *iya* and explains how the utterance differs from a normal negative response through a conversation/discourse analysis of Japanese conversations for assessment.

**Key words:** *iya*, epistemic primacy, Japanese conversation

キーワード: 「いや」、認識的優位性、日本語会話

### 1. はじめに

言語学習者なら誰でも、目標言語を使用する実際の社会生活の中で、授業や教科書の中では扱われなかった語彙・表現、または知っている語彙・表現の知らない使い方に遭遇する機会があるだろう。そうした語彙・表現の中には、日常生活においてむしろ頻繁に、何気なく使用されているものもある。実用語としては一般的でありながら、学習項目としては非標準的／例外的な扱いとなるこうした語彙・表現は、授業の中で学習を一通り終えた「ポスト学習者」が実践を通して身につけるべきものと言える。つまり、これは自律学習の問題ということになるわけだが、それでもそうした語彙・表現について参考となる何らかの記述を残しておくことは、実用日本語への関心を高めるポスト学習者の学びを支える重要な仕事となるだろう。

本稿では、日常生活においては頻繁に使用されながら、日本語教育における学習項目として扱われることが稀な表現「いや」に焦点を当て、さらに日本語教育の文脈ではほとんど言及されることがない、会話における「認識性 (epistemics)」に関連した使用について分析・考察する。以下、第2章では、まず日本語会話における感動詞「いや」の意味用法について、先行研究での知見を概観する。特に「いや」が有する否定性に注目し、「何をどの程度否定するのか」に焦点を当てる。本稿では、この「いや」が頻繁に用いられる会話の一例として「評価を述べ合う会話」を取り上げるが、評価という行為には常に評価者の評価対象にかかる知識や経験が深く関わってくる。そこで第3章では、会話研究において

たびたび焦点となる会話参加者の知識や経験への志向、すなわち「認識性」について、先行研究での記述を概観する。第4章では、実際に「いや」が頻繁に現れる日本人2名による評価を述べ合う会話を観察し、「いや」の認識性に関連する振る舞いを分析する。また第5章では、分析の結果に基づいて、「いや」の否定性を再考しつつ、会話における「いや」と認識性との関連についてさらなる一考を加え、最後の第6章で本稿のまとめと今後の課題を述べる。

## 2. 会話における「いや」の機能

感動詞「いや」は、「いえ」「いいえ」と並ぶ否定応答表現であるが、「いえ」「いいえ」よりも意味用法の種類が多く、使用頻度も高いとされている（山根 2002、冨樫 2006）。山根（2002）は、「いや」が為す否定として次の3つを指摘した。すなわち、①否定応答表現の最も基本的な機能と言える Yes/No 質問への否定応答など、前出の発話を否定する「単純否定」、②相手からの感謝、謝罪、賞賛に対して、体裁に配慮した上でその好評をあえて否定する「気遣い否定」、③「いや」を伴う応答に否定のニュアンスがあることを示す「シグナル否定」の3つである。以下の(1)は気遣い否定、(2)はシグナル否定の例である。

- (1) （宅地建物取引主任者試験を受ける V の夫について）

X：宅建通るんかな（え）優秀じゃけん通るんじやろうな

V：いや そんなことないと思います

（山根 2002: 126, 例 18）

- (2) M：それで どういうコースがお望みかな あの 半日岡山観光は

N：いや なんでもいいよ

（山根 2002: 125, 例 14）

気遣い否定もシグナル否定も、前出の発話から字義的に明らかとなる命題レベルの事実を否定（単純否定）しているのではなく、当該の発話を巡る当事者らの心情に係る否定を表しているものと考えられ、こうした命題レベルとは異なるレベルでの否定が可能になるということも「いや」の特徴とされている（小出 2011）。また単純否定であっても、その対象は前出の発話が提示する情報だけでなく、その発話によって情報を提示する行為に及ぶ事例も指摘されている（冨樫 2006）。

上述したいずれの意味用法であっても、「いや」は発話の冒頭（initial position）で用いられることが最も多く、発話の「切り出し」として機能し、後続するコメント部分が前出の発話を否定したり、Yes/No 質問への否定応答であったり、否定のニュアンスを帯びたりしていることを前もって示す「前触れ（preface）」としての機能があることも指摘されている（Saft 1998, 山根 2002, 串田 2005）。このような会話への参与（発話権の獲得（Sacks et al. 1974））や会話の展開に関わる機能（「談話操作」（山根 2002））についてもここで確認して

おきたい。

Saft (1998) では、テレビの討論番組、医者と患者の会話、家族の食事中の会話をそれぞれ観察し、その中で用いられた「いや」が、その出現状況から判断して、①Yes/No 質問への回答、②反論の表明 (expression of contradiction)、③修復の開始 (initiator of repair)、④発話権の奪取 (turn-grabber) といった4通りに解釈できることを明らかにした (Saft 1998: 123)。①については、上述の用法と概ね共通するもので、単なる否定応答としてだけではなく、質疑のやり取りに潜む含意 (implication) への反論といった命題レベルを超えたレベルへの否定についても言及されている。Saft (1998) における記述に特徴的なのは、発話冒頭の「いや」自体は否定応答、表明、開始、奪取を実行し、それに後続する叙述部分がその詳細を補足するという構造を持つことに注目した点である。ただし、先行する発話がYes/No 質問でない場合には、実際のところ「いや」だけではどの行為を実行するのかは明らかではない。その詳細は後続する叙述部分によって補完される必要がある。換言すれば、冒頭の「いや」は実行を表明することで行為の「前触れ」となり、後続する展開を緩やかに投射する働きを担っている。

(3) family dinner conversation [筆者により日本語表記に改訂]

- 1 M: あ(.) そう: だ あした どうする
- 2 D: お昼 市役所に行って[(\*)]
- 3>M:                            いや フミちゃん(.) そうじゃなくて(.) 朝
- 4        おばあ: ちゃんのところ行くよね タクシー呼んだほう
- 5        が(.) いいかね
- 6 D: バスでいいんじゃない?

(Saft 1998: 128-129, (6))

(3)の3行目に見られる「いや」は、後続する内容から考えると、「修復の開始」を表明するものであることがわかる。つまり、1行目でMが「あした どうする」と問いかけたのに対し、Dは2行目で「お昼 市役所に行って」と、明日の昼の行動について言及を始めるが、続く3-4行目でMが「朝 おばあ: ちゃんのところ行くよね」と説明することによって、ここでMが期待していた展開が「明日の昼」についてではなく、「明日の朝」について話し合うことであったことがわかる。しかし、3行目冒頭の「いや」だけを見ると、それは何かしらを否定する意図を表明する (does serve as a negative answer) ものでしかなく、それが単なる不同意なのか、もしくは情報の一部を修正 (correct) することを意図しているのか、いくつかの可能性が想定され、それらを明確に区別することは難しい。(3)では、3-5行目でMが改めて問い直すことにより話を戻した (back on track) ことから、ここでの「いや」が「修復の開始」を表明するものであったと解釈することが可能になっている。

Saft (1998) によれば、この「いや」という端的な発話 (a short and easily-uttered item) で切り出すことは、特に討論のような目紛しくトピックが推移するインタラクションにおい

て、参加者が発言の機会を他者からもわかるように確保するための重要な手段となる。紙幅の関係上、ここでは事例を割愛するが、先行する発話末にオーバーラップする形で「いや」を発話し、他者の介入を牽制しつつそのまま発言を継続する「発話権の奪取 (turn-grabber)」は、当該発話が発揮する主張の強さ (an assertive quality) を象徴する振る舞いであるように思われる (Saft 1998)。

また串田 (2005) でも、上記の「修復の開始」を表明する「いや」に類似する振る舞いとして、先行する発話が投射した「ありうる展開」をブロックするという事例を挙げている。

- (4) (数名の若手研究者が、自分達の会話を収録しており、収録器材は隣室のモニターに繋がれている。中座して隣室に行っていた吉田が戻ってきて、着席しながら次の発話。))

吉田：°どんな感じで撮れているかがわかったぞ。°  
(0.3)  
→松本：え：っ↑撮ってる[んですかやっぱり：。=  
栗本： [ええ：  
中村：=そ[らそうや：。  
⇒吉田： [いや撮ってるよ。=  
中村：=当然や：。  
吉田：°あの°(.)[ちゃんと全員の-](.)[全員の-  
中村： [俺はもうつねに-](.)[見られてる  
とゆう意識でしゃべってまっせ。

(串田 2005: 47, 49, (4))

(4)の最初の吉田の発話が投射する展開は「どんな感じで撮れているかを説明する」というものであることが容易に想像できるだろう。しかし、その直後の松本の発話はそうした期待から逸れるもので、当該の吉田の発話を「前置きとして聞き、展開を促すものではなく、それ自身で完結した発話として聞き、確認を求めるもの」(串田 2005: 50) となっている。これに対して吉田は「いや」を発話することで、松本の質問が投射する「ありうる展開」をブロックし、続けて当初の計画通りに、「どんな感じで撮れているか」の説明(「ちゃんと全員の-」)へと移行している。この事例における「いや」も、会話の展開に対して意義を唱えるという点では「修復の開始」を表明する「いや」と類似しているが、「いや」に後続する展開が、(3)の事例のように一旦話を戻して改めて質問し直すというものではなく、端的な「ブロック」の手続きを挿入しただけで、そのまま話を前に進めるという流れになっている。この「ありうる展開のブロック」という行為は、形態としては端的でありながら主張の強い否定表現であるという「いや」の特徴が最も明確に反映された振る舞いであると言えるかもしれない。

### 3. 会話における認識性

前章では、否定応答表現の一種である感動詞「いや」の会話における働きについて概観

した。Saft (1998) では、この「いや」が討論場面において頻繁に使用されていることを指摘したが、本稿では、ある事柄に対する評価を述べ合う会話でも、「いや」が頻繁に用いられていることを示す。ただし、会話における評価行為について記述する場合には、それに関連して会話／相互行為分析研究においてたびたび言及される鍵概念である「認識性 (epistemics)」を無視することはできない。後述する分析と考察にも深く関わる概念であるため、ここで概観しておきたい。

会話の中では、参与者同士が互いの有する知識について主張し、堅持し、競い合うような場面が見られることがある (Heritage 2013)。こうした「会話参加者たちの知識・経験に対する志向性」を「認識性 (epistemics)」と呼び、それは会話の中で「様々な形で立ち現れ、発話の組み立てを形づくり、会話の組織を支えている」(早野 2018: 194)。各人が所有する知識・経験の様相は互いに共通することもあれば異なることもあるだろう。そうした参加者間に潜在する認識的な均衡／不均衡は、特にある物事について評価を述べ合うような会話の際に、誰が優先的に評価を述べるかといった認識的な資格(entitlement)や権威(authority)についての交渉となって立ち現れ、その中で参加者たちは、互いに自己の「認識的優位性 (epistemic primacy)」を主張し、自己の「認識的テリトリー」への侵入を防ごうとする (Hayano 2011, 早野 2018)。そうして参加者たちが互いの「認識的立場 (epistemic status)」を明確にし互いにそれを受け入れること、すなわち「認識的調和 (epistemic congruence)」を達成することへの志向もまた、会話における各発話や振る舞いのあり方を左右することになる (Heritage 2013, 早野 2018)。

他者と評価を述べ合う際には、評価対象に対してどちらが先に評価を述べるかということが重要な関心事となりうる。なぜなら、先に述べられる第一評価は、その行為主体が他者よりも優先的に対象を評価する権利を持つことを、もしくは単にその対象について他者よりもよく知っていることを主張する行為として理解されるからである。一方で、第一評価に後続する第二評価は、先行する第一評価を前提とし、それに依存する消極的な評価として理解されることになる (cf. 早野 2018)。その順序が実際の参加者間の認識的立場を反映したものであれば問題ないが、必ずしもそうはならない。したがって、時には認識的権威の主張を弱めつつ第一評価を述べることや、逆に強く主張しつつ第二評価を述べるといった工夫を、様々な言語的・非言語的リソースを用いて施すことも必要となってくる。

Heritage (2002) は、先行する第一評価に依存しない「認識的独立性 (epistemic independence)」をもって評価する振る舞いの例として、第二評価を述べる位置で発話冒頭に ‘oh’ を伴う発話を挙げている。Heritage (2002) は、相手の発話に対する反応が冒頭に ‘oh’ を伴う発話である場合、それは当該の相手の発話の関連性や適切さを問題視するものとして理解されるとした上で、冒頭に ‘oh’ を伴う反応が、先行する第一評価に同意しつつも、その第一評価への依存関係を打ち消し、自分が述べる評価の独立性とともに、認識的に優位な立

場にあることを主張していると説明する (Heritage 2002: 197-199)。

- (5)
- 1 Gay: So the ↑number is (0.2) oh: one oh:.
- 2 Jer: Oh one oh:.
- 3 (1.0)
- 4 Jer: Yeup,
- 5 Gay: ↑Four ni:ne,
- 6 (0.5)
- 7 Jer: Ri:ght?
- 8 Gay: Sev'n three, u-six o:ne?hh
- 9 (0.6)
- 10 Jer: Sev'n three: six o:ne?
- 11 (0.3)
- 12 Gay: Ei:ght ni:ne,
- 13 Jer: →'Gosh' it goe:s (.) goes on'n on
- 14 Gay: →Oh it doe:s Germany doe:s.
- (Heritage 2002: 199, (5))

(5)の会話は、Gay が Jeremy (Jer) にドイツの電話番号を伝えようとしている場面であるが、Jeremy は当時 (1980 年代) の自国 (英国) の番号よりも桁が多いその番号に驚いていることが 13 行目の発話から確認できる。それに対して Gay は、その Jeremy の「今ここ (here and now)」での驚きを受けてそれに同意することもできたはずであるが、14 行目で 'oh' を伴う反応を返すことにより、桁の多さに対する Jeremy の驚きを退け、“it doe:s Germany doe:s.” と、それがドイツでは当然のことで驚くに値しないといったニュアンスの発話を続けている。これによって Gay は、海外に電話をかけることについては Jeremy よりも自分に「一日の長」があることを主張し、自己の経験に基づく評価対象への独立したアクセスをもって改めて対象を評価し、自己の認識的権威を主張している。

本稿の目的は、上のような認識的権威を主張する 'oh' と同じように、発話の冒頭に現れる「いや」にも、話し手の認識的な独立性と権威を主張する働きがあることを示すことである。次章以降では、二人の日本人男性がある飲食店について評価を述べ合う会話を取り上げ、その中に現れる「いや」と認識性との関連について分析・考察する。

## 4. 事例分析

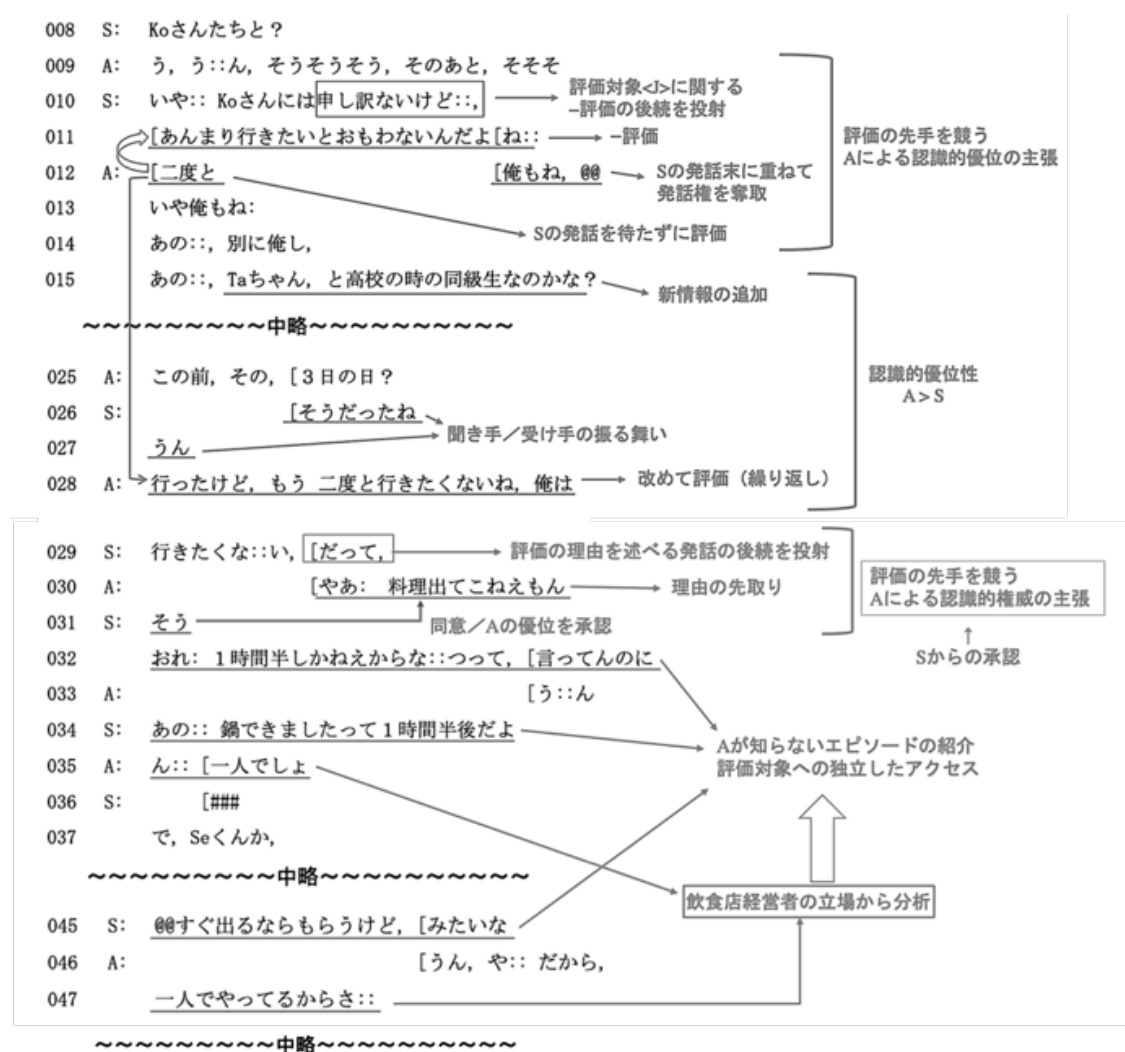
### 4.1 データの概要

本稿で分析するのは、札幌市内の理容室で理容師 S が客 A に対して行う理容行為中の会話である。この会話 (世間話) と理容行為が同時並行で進められる「マルチアクティビティ (multiactivity)」(Haddington et al. 2013) の様相には注目に値する現象が数多く観察される (cf. 名塩 2017, 2021, 2022) が、本稿ではその点に関する記述を割愛し、S と A がある飲食店について評価を述べ合う場面 (3 分 5 秒) を、日本人同士の会話として分析する。分析の対象となった事例を書き起こした文字資料<sup>1)</sup>は全体で 145 行に及ぶが、(6)では、紙幅の関係上、いくつかの場面を抽出して提示する。

S と A は理容師と客という関係だけでなく、プライベートでも仲が良く、ゴルフなどの共通の趣味を持つ。会話の中で評価対象となる飲食店 J は、Ko の高校時代の同級生が経営する店である。S と Ko は麻雀仲間であり、飲食店 J は彼らが麻雀をした後に時々行く店でもあった。会話の主旨となるのは、J やその店主に対する評価であり、S と A はそれぞれ Ko を伴って個別に J に来店した経験をもとに評価を述べ合うことになる。また、A は近所で小料理屋を営み、その厨房に立つ飲食店経営者である。S も理容室経営者ではあるが、飲食店とはかなり業態が異なるため、こうした差異が実際の会話の認識性にも影響を及ぼし、最終的には A のほうが認識的に優位な構図で会話が収束することになる。まずはそうした認識的調和に至るまでのプロセスを次節で確認していく。

## 4.2 分析 1：認識的調和に至るまでのプロセス

(6) 理容師 S と客 A との会話：居酒屋〈J〉について



091	A:	<u>で途中で、なんだあの、あそこのへん、あのビルに入ってるさあ</u>	
092		<u>スナックとかの出張、やってんだよねあれね:</u>	
093	S:	あ:, 出前, 行く[##	
094	A:	[出前, うん	客として来店した時の エピソード
		~~~~~中略~~~~~	
107	A:	<u>け, お客さん帰ったあと, 片付けられないんだよ</u>	
108	S:	あ:::	
109	A:	<u>やずっと出っ放しちゅうのも俺[あんまし好きじゃないんだよね:あれ</u>	
110	S:	[うん	↑ 経営者目線で分析
111		あったあった, うん	
112	A:	<u>あれだったらさ, もう他のお客さん来ないでくれみたいな[話でしょ</u>	
113	S:		[う:: ん
114	A:	<u>かえって効率悪いんじゃないかなと思うんだよね</u>	

会話序盤（008-028 行目）のやり取りでは、まず、飲食店 J が話題に挙がって、いよいよ評価を述べようという 010 行目に、S が「申し訳ないけど」と、これから何かしらマイナスの評価が述べられることを予感させる発話を行う。案の定、「あまり行きたいとは思わないんだよ」とマイナスの評価が述べられるが（011 行目）、A がこの発話の冒頭に重ねて「二度と」と発話し、またその発話末にも「俺もね」と発話を重ねているのがわかる（012 行目）。さらに A は、この直後にも「いや俺もね:」と同様の発話を繰り返して発話権を獲得し（013 行目）、さらなる新情報を追加しながらしばらく話すことになる。ここまでの一連のやり取りは、S と A の間で評価の先手を取ろうと競い合っているようにも見える。011 行目では、直前の発話からも投射されているように、これから S が評価を述べようとしているのは明らかであるが、012 行目ではその S の評価発話を待たずに A が我先にと評価を述べ始め、自己の認識的優位性を主張しているように見受けられる。

013 行目以降もしばらく話を続ける A に対し、S は「そうだったね」「うん」（026-027 行目）のような発話で A の評価を聞く立場にまわり、最終的に、A が 012 行目で言いかけた評価「もう二度といきたくないね」を改めて繰り返す（028 行目）。この 028 行目の発話は、ここまでの一連のやり取りが、総じて A の評価を述べるものであったことを決定づけているようでもある。つまり、この時点ですでに A の認識的優位性が表面化してきていると言えるだろう。

028 行目以降のやり取りでも、A の優位性が顕著に現れている。028 行目の A の評価に、S が 029 行目で同意しつつ、「だって」と言いかけて、直後に「いきたくない理由」が述べられることが投射される。しかし、ここでも A がその「だって」に発話を重ねて「やあ、料理出てこねえもん」とその理由を先取りし、S もそれに思わず「そう」と同意している（030-031 行目）。ここでも A の優位性が S の承認を得るような形になっているのがわかる。032 行目からは、S も A が知らないエピソードを披露することで、対象への独立したアクセスとともに若干の主張を試みるが、034 行目の「あの一鍋できましたって 1 時間半後だ



よ」という発話の直後に A が「一人でしょ」と、ここでも発話を重ねている (035 行目)。この発話が意味するところは 048 行目以降で明らかにされるが、比較的規模の大きい店を一人で切り盛りしようとする結果、料理が出るのに時間がかかってしまうということであり、S が語るエピソードの要因をまたも A が先取りして言うてしまうということが起こっている。ここには、S が客として経験した J での出来事を、A が飲食店経営者の立場から分析するという権威的な側面も見受けられる。

会話の終盤になると A が自ら客として J を訪れた際のエピソードを披露し (091-109 行目)、それをさらに経営者目線で分析する (112-114 行目) という件を経て、最終的には、A が評価し S がそれに同意するという構図で一連の評価活動が収束していく。

### 4.3 分析 2 : 「いや」による認識的優位性の主張

分析の対象となった 3 分 5 秒の会話の中で、感動詞「いや」、またその異形と考えられる「や::」「や」が発話の冒頭に現れる回数は 17 回に及ぶ。これは評価を述べ合う会話と「いや」との間に何かしらの関連があることを窺わせるのに十分な頻度と言えるだろう。ここではそのいくつかを抽出し、認識性に関わる「いや」の機能について分析する。

まず、本事例の中に現れる「いや」の多くは、必ずしも質問に後続する応答の位置に現れているわけではない。また「いや」がもつ否定のニュアンスとは裏腹に、その後続部分は必ずしも先行する (評価) 発話に対して反論するような内容にはなっていない。この点は、Heritage (2002) が指摘する ‘oh’ の特徴、すなわち、基本的には先行する評価に同意する発話の冒頭に現れるといった振る舞いに通じるものがある。

#### (7) 003-015 行目

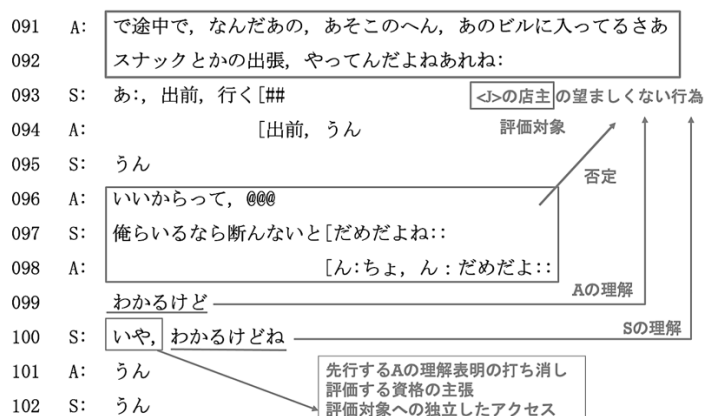
006 A: [うんうん  
007 この前行ったよ俺らも  
008 S: Koさんたちと?  
009 A: う、う::ん、そうそうそう、そのあと、そそそ  
010 S: いや:: Koさんには申し訳ないけど::, (Koに対する) 気遣い否定  
011 [あんまり行きたいとおもわないだよ[ね:: 否定のニュアンスを付加  
012 A: [二度と [俺もね、@@  
013 いや俺もね: Sによる第一評価を退ける  
対象への独立したアクセス  
014 あ::, 別に俺し、  
015 あ::, Taちゃん、と高校の時の同級生なのかな?

(7)では、010 行目で S によって、013 行目で A によって、それぞれ「いや」が発話されている。010 行目の「いや」の場合、先行する内容には、応答すべき質問もなければ、次の展開を強く予期させるような発話もない。そうすると、この「いや」は先行する内容に対して否定性を発揮するものではなく、山根 (2002) が指摘した「シグナル否定」のよう

に、後続する発話に何かしらの否定のニュアンスを付加するものと考えるべきだろう。実際、後続する発話は「Ko さんには申し訳ないけど::」と、否定的な評価が語られることを窺わせるものとなっている。また「申し訳ない」という表現からは、他者 (Ko) への配慮が感じられることもあり、山根 (2002) が想定するような実際の会話相手である A に対しての配慮とは言えないが、後続する発話の批判的側面を和らげる「気遣い否定」の一種として見ることもできるかもしれない。

013 行目の「いや」は、Heritage (2002) が指摘する ‘oh’ とほぼ同じ振る舞いをするものとして説明することができるだろう。つまり A は、直前の S の発話「あんまり行きたいとおもわない」(011 行目)に同意しつつも、「いや」によって一旦その S の主張を退け、もしくは S の発話が投射する展開を一旦ブロックし、その後にあえて同じ主張／展開を改めて A 自身の語りで提示し直す (013 行目以降) ということを行っている。同時に、この振る舞いは認識的独立性を主張することにもなる。010-011 行目で提示された S の第一評価からは独立した A の評価を 012 行目から語ることであり、この一連の評価行為が、上述の通り、028 行目までに A が認識的に優位な立場を確立するきっかけとなっている。

#### (8) 091-102 行目



(8)の 100 行目にも「いや」が見られるが、これも先行する発話の評価を一旦打ち消し、直後の評価の認識的独立性を主張する役割を果たしているようである。つまり、092 行目までに A によって語られた J の店主の行動に対し、S は 097 行目で「俺らいるなら断んないとだめだよね」と否定的な評価を述べる。それに対し A も 098 行目で「だめだよ」と S に同調するが、その直後に「わかるけど」と付け加えている (099 行目)。さらにその直後、発話の冒頭に「いや」を伴って、S も「わかるけどね」と A の補足に同調している。この「わかるけど」は、先行する否定的評価の付帯条件として、「(評価対象である) 店主の行動にも一部理解できる場所はある」ということを事後的に述べる発話と言えるだろう。

「わかるけどね」が逆接の「けど」を伴って後続位置に否定的な評価を投射しているこ

とから、ここでの「いや」は先行する否定的な評価を撤回するものではない。この「いや」が退けようとするものは、本来ならば言うまでもない前提的理解をあえて表明した A の振る舞いであり、それがもたらしうる誤解、すなわち、一方でそれを表明しない S が理解していないかのように捉えられる可能性である。当該の J の店主の「身の上」は、業態に多少の違いはあれど、S も A も同じ客商売を営む立場としては批判し難いもののようで、そこに理解を示すこともまた、当該の評価対象に対して優位に発言する者（評価対象の「身の上」をよく知る者）の条件と言えるかもしれない。そこで S は、099 行目で A が事後的に付け加えた理解を、100 行目の冒頭で「いや」を発話することによって一旦退け、それに続けて「わかるけどね」と、A と同様に、しかし S 自身の発話で理解を示し、評価を述べる資格を主張していると言えるだろう。また言うまでもなく、この「わかる」が表す理解の対象は、会話参加者である S や A ではなく、話の登場人物であり評価対象でもある J の店主である。つまり、100 行目で S が「いや」の直後に「わかる」と述べることは、先行して表明された A の評価や理解の表明を一旦退け、評価対象である J の店主への独立したアクセスを築き直す振る舞いでもある。いずれにしても、ここでの「いや」もまた、認識的優位性の主張に寄与するものであると考えられる。

## 5. 考察

前章では、日本人同士で評価を述べ合う会話の中に現れた感動詞「いや」の振る舞いについて、いくつかの事例をもとに認識性との関連から分析した。先行する相手の発話の終了部に自己の発話の開始を重ねたり、相手の話の結論を先取りしたりする手法によって参加者たちが競うように認識的優位性を主張する当該の会話において、「いや」もまたその主張に寄与する発話として頻繁に使用されていた。しかし、それらは質問に対する否定応答としてではなく、また先行する評価を否定し、反駁のきっかけを作るようなものでもなかった。本稿の分析で明らかとなったのは、発話の冒頭に現れる「いや」が認識的なレベルでの競合に関連しており、互いに評価を述べ合う際に参加者同士が認識的優位性を代わる代わる主張し合うインタラクションの節目を顕在化するかのような振る舞いであった。その節目においては、認識性にかかる相手の主張を退け、代わって自己の優位性を主張することで、参加者間の認識的構図を転換しようとする試みが観察された。ここで重要なのは、「どう評価するか」ではなく、「誰が評価するか」である。本稿で分析した事例でも、「いや」に後続する評価は、基本的には先行する評価と同等の評価を表明するものであった。しかし、それは先行する評価と「同等」ではあっても、先行する評価に「賛同」しているのではない。あくまで話し手自身の資格をもって、話し手自身の言葉によって表明された評価であるという点が大きな意味を持つ。そのためには、自己の評価を述べるに当たって、すでに評価を述べている相手の認識的優位性の影響を「御破算」にするのが最も有効な手

段であると言えるだろう。評価発話の冒頭に現れる「いや」には、話し手による認識的独立性の主張の一環として、先行する相手の認識的主張を一方的に退けようとする意図が見受けられる。ここには、Saft (1998) が指摘したような「いや」発話の主張の強さ (an asserted quality) が感じられ、その振る舞いは「発話権の奪取 (turn-grabber)」と呼ぶにふさわしいものと言えるだろう。

「いや」の否定性が及ぶ先については、若干の補足的考察が必要であろう。上述の通り、本稿で分析された「いや」は、先行する相手の認識的主張を退ける、すなわち、当該の事柄についての評価を述べるに当たって相手が自分よりも有意な立場にあるという（間主観的）認識を否定するものであった。この認識的立場の否定は、必ずしも評価の内容を否定することにはならない。実際に本稿の事例は、先に否定的評価を行った参加者の（先行するが故の）認識的優位性のみを否定し、その後改めて表明された評価は否定的なまま、しかも両者の間で使用する語彙や表現も類似していた。また、評価の内容が否定的であるということも、「いや」のもつ否定性とは別に捉えられるべきだろう。個別の事例を示す紙幅の余裕はないが、例えば、「あの映画、よかったよね」という肯定的評価に続けて、別の人物が「いや、本当によかったよ」と述べる連鎖は、決して不自然なものではない。このように肯定的評価を述べ合うやりとりの節目にも「いや」が現れうることを考えると、これらの「いや」は、あくまで会話／相互行為の背景にある認識的な「押し引き」に関連する言語標識であって、Yes/No 質問に後続する「いえ／いいえ」等の否定応答表現とは一線を画すものであると考えるべきだろう (cf. 串田 2005)。

## 6. まとめと今後の課題

本稿では、日本人同士の評価を述べ合う会話における感動詞「いや」の振る舞いについて、特に認識性との関連に焦点を当てた分析と考察を行った。その結果として、まず本稿で分析の対象となった評価を述べ合う会話事例では、認識的に優位な立場を巡って会話参加者たちがその評価対象にかかる知識や経験の豊富さ／希少さを互いに主張し合うやりとりの中に、「いや」が際立つ頻度で現れることを確認した。またそれらの「いや」が、質問に後続する位置で否定応答表現として用いられるのではなく、先行する相手の評価発話と同じ評価を繰り返す評価発話の冒頭に現れ、先行する相手の評価発話による認識的優位性／独立性の主張を退け、それとは独立した形で改めて自分の評価を述べるという手続きに寄与するものであった。この手続き自体も認識的優位性／独立性を主張することになるが、当該の事例における「いや」の否定性は、あくまで会話／相互行為の背景にある認識性に影響を及ぼすものと考えられ、先行する評価の内容や評価行為の適切さを否定するわけではないことも確認することができた。

感動詞「いや」の日常会話における使用頻度の高さは周知の事実と言えるだろう。また

基本的には「いえ」「いいえ」と同様に、「いや」も何かしら否定のニュアンスを伴うというのが一般的な日本語話者の理解であると思われる。日本語学習者の中には、それが実際に使用されている表現である以上、その用法について学びたいと思う者もいるだろう。しかし、上のような一般的な理解だけを伝えられた学習者が、本稿で取り上げたような「いや」の使用に出会った場合の混乱は想像に難くない。そもそも本稿で焦点を当てた「いや」の使用は、もはや語学として教授／学習できるようなものではない。多くの実践を通して実際にその使用の現場に立ち会い、認識性にかかる意識的／無意識的な主張の応酬の中で、その意味を自分で学び取っていく必要がある。そうした学びをサポートすることもまた困難ではあるが、例えば「いや」の使用であれば、その学習リソースとして「評価を述べ合う会話」や「討論」といった会話参加者間で認識性にかかる競合が期待されるものを提供するといった場面／目的の絞り込みが有効であるように思われる。この他にも、教授／学習が難しい言語使用は少なからず身の回りに存在している。そうした言語使用についても様々なアプローチで記述を試み、知見を重ね、その教授／学習の可能性を検討していくことも、日本語教育分野における今後の課題となるだろう。

## 注

- 1) 本稿で分析に用いる書き起こし資料の表記について、「[」は発話の重なり開始部分、「:」は音の伸ばし、「#」は聞き取れない発話、「@」は笑い、「(0.0)」は沈黙の期間（秒数）をそれぞれ表す。なお、他の文献から引用した書き起こし（(3)(4)(5)）については、引用元の表記凡例を参照されたい。

## 参考文献

- 小出慶一 (2011). 「いや」の否定性と談話での機能『埼玉大学紀要（教養学部）』47(2), 145-156.
- 串田秀也 (2005). 「いや」のコミュニケーション学 ―会話分析の立場から『言語』34(11) 大修館書店, pp. 44-51.
- Hayano, K. (2011). Claiming Epistemic Primacy: Yo-marked Assessments in Japanese. In Stivers, T., Mondada, L., and Steensig, J. (eds.), *The Morality of Knowledge in Conversation*. Cambridge University Press, pp. 58-81.
- Haddington, P., Keisanen, T., Mondada, L., and Maurice N. (Eds.) (2014). *Multiactivity in Social Interaction: Beyond Multitasking*. Amsterdam: John Benjamins.
- 早野薫 (2018). 「認識的テリトリー ―知識・経験の区分と会話の組織」平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実（編）『会話分析の広がり』ひつじ書房, pp. 193-224.
- Heritage, J. (2002). Oh-prefaced responses to assessments: A method of modifying agreement/disagreement. In C. Ford, Fox, B., and Thompson, S. A. (eds.), *The Language of Turn and Sequence*. Oxford University Press, pp. 196-224.
- Heritage, J. (2013). Epistemics in conversation. In Sidnell, T., and Stivers, T. (eds.), *The Handbook of Conversation Analysis*. Wiley-Blackwell, pp. 370-394.
- 名塩征史 (2017). 「理容室でのコミュニケーション 理容行為を〈象る〉会話への参与」片岡邦好・池田佳子・秦かおり（編）『コミュニケーションを枠づける：参与・関与の不均衡と多様性』くろしお出版, pp. 243-262.
- 名塩征史 (2021). 「会話への途中参加を巡る動機付けと許容に関する認知語用論的考察 理容室でのコミュニ

- ケーションを対象とした事例分析をもとに」 田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝（編）『動的語用論の構築へ向けて』 第3巻 開拓社, pp. 162-181.
- 名塩征史 (2022). 「日常会話を伴う理容行為に状況づけられた『見る』 —鏡を介して『見る／見せる』システムの分析」 牧野遼作・徳永弘子・砂川千穂（編）『言語・コミュニケーション研究の地平』 第3巻 ひつじ書房, pp. 102-125.
- Sacks, H., Schegloff, E., and Jefferson, G. (1974). A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation. *Language*, 50(4)-1, 696-735.
- Saft, S. (1998). Some Uses and Meanings of Utterance: Initial *iya* in Japanese Discourse. *Japanese/Korean Linguistics*, 7, 121-137.
- 富樫純一 (2006). 「否定応答表現『いえ』『いいえ』『いや』」 矢澤真人・橋本修（編）『現代日本語文法 現象と理論のインタラクション』 ひつじ書房, pp. 23-46.
- 山根智恵 (2003). 「談話における『いや』の用法」『岡大國文論稿』 31, 136-145.